宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像社会
〒811-3505 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940－62－1311㈹
定価 一年送料共 1000円

秋季大祭

田島放生会盛大に斎行

海上神幸祭は台風（九号）のため中止

神郡宗像に秋を告げる、当大社秋季大祭「田島放生会」が、十月一日より三日まで斎行され、大祭中は宗像郡市内はもとより県内外各地からの参拝者で大いに賑った。只大祭の初頭を飾る海上神幸「みあれ祭」は、台風九号の接近により各漁協組合長・大社と協議の上やむなく中止となった。

この「みあれ祭」は昭和三十七年、海洋神事奉賛会を結成し、七百年ぶりに復活した神事で、玄界灘の荒波の中を舞台に、海上安全と大漁とを祈る一大ページェントとして全国に知られている。今年で三十七回を数える壮観な海上絵巻であるが、この間十九年前の昭和五十四年に、台風十八号のため規模を縮小し斎行した例はあるが、本年のように完全中止となったのは、復活後初めてのことである。

季節的に台風シーズンであり、玄界灘の荒波の中を約二十キロにわたり、四・五百隻の船団が二隻の御座船を中心に繰り広げる海上大パレードだけに、万一の事故でもあれば取り返しがつかない。例年天候には特に留意し、奉賛会を組織する各漁協を始め、関係諸庁の指導を仰ぎ斎行される神事である。

今回の「みあれ祭」中止にあたっては、当大社、各漁協、海上保安庁等で慎重に検討され、秋季大祭の中でも重要な神事ではあるが、安全が第一との判断で決定された。決定時の台風情報は“中型で並の強さの台風九号は、三十日午前九州西海上を北上、長崎県などを中心に風が強まり、北部九州は警戒が必要”と報じていた。

「みあれ祭」中止の決定と同時に、当大社はその対応に追われた。沖津宮・中津宮の御神璽を辺津宮へお迎えしなければ秋季大祭を斎行することができない。

早速大島中津宮へ連絡し、本日中（九月二十日）に沖・中両宮の御神璽をお迎えすべく出御祭の準備を通達、中津宮御座船の健栄丸（神湊漁協所属、船長＝三苫健二氏）を仕立て、神職二名が御座船に乗船し中津宮へ向った。

中津宮では急遽の決定にもかかわらず、沖・中両宮奉賛会、大島漁協、大島駐在所を始め全村民が迅速に対応、出御祭後の御神幸では大島小学校鼓笛隊が先導を奉仕するなど、十月一日の本来の姿と変らず斎行され、大島村民の崇敬の念の厚さを感じた。両宮の御神璽は三十日御座船健栄丸にて大島を出御され、正午には辺津宮へ無事入御された。

一方、「みあれ祭」中止に伴い、海上神幸だけでなく陸上神幸等一日に斎行される関連諸祭も中止となるため、自動車園簿編成の御座車を始めとする各車奉仕予定者、宗像警察署、報道機関等への連絡にも追われ、中止決定後の社務所は、入御準備と共に騒然となったが、御神璽が無事入御され、関係諸庁への対応が一段落すると、秋季大祭斎行の目処がつき安堵の空気に包まれた。

十月二日、台風の影響は多少残るものの、心配された程のことはなく、午前十一時秋季大祭一日祭が、神社界を始め各界諸氏、氏子崇敬者多数参列のもと斎行され、三日間に亘る「田島放生会」の幕が開いた。

祭典では、皇室の弥栄と国家の安泰、国民の平穏とが祈念されると共に、一日祭には地元青年団奉仕による主基地方風俗舞が、二日祭には喜多流梅津中弘氏奉仕による翁舞が、三日祭には玄海中学校女子生徒奉仕による浦安舞が、更に二日早朝には福間町宮木貞彦氏外奉仕による流鏑馬神事が奉納された。また三日には宗像護国神社秋季大祭を斎行、護国の鎮として散華された英霊の御魂をお慰め申し上げた。

境内には二百軒余の露店が軒を並べ、老若男女の参拝者で夜遅くまで賑いをみせた。この「田島放生会」が終ると、宗像では黄金色の稲穂を垂れ、奥津御年の刈入れが始まる。

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園二－三一（〒812）
電話 福岡（092）六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話 京都（075）三四一－三三四一㈹～四番
三四三－三三四一番

——◇——

九月三十日
沖・中両宮御神璽
御座船奉仕
健栄丸（9.1t）神湊魚協
船長 三苫健二（49才）

十月一日
宗像郡内神職奉幣使
摩利支神社
宮司 中村 侃
随員 吉良 義男
（宮地嶽神社）
宮地嶽神社献幣使
権祢宜 伊東 寿彦
氏子奉幣使
勝浦 小澤 順一

七五三祭の御案内

毎年十一月十五日に数え年三才の男女児、五才の男児、七才の女児をつれて神社に参拝し、今日までの無事発育を感謝し、更に将来の成長を祈願するお祭りです。

昔は三才の男女は髪置、五才の男児は袴着、七才の女子は帯解きの祝いが行われていました。この我国古来の慣習を今日に伝えるのが、七五三祭りです。

当大社でも、お子様の健やかな成長と幸せをお祈りする、恒例の「七五三まつり」を、本年も左記により盛大に執り行いますので、皆様お誘い合せの上御参拝下さいます様ご案内申し上げます。

記

期間　平成十年十月二十六日～十一月十六日
（尚、この期間以外でも、おまつりは行っております。）

初穂料
一件（一人）三〇〇〇円
一名増すごとに二〇〇〇円の追加となります。

授与品
御祈願お申し込みのお子様には、お守り、千歳飴、御幣などを授与いたします。

余滴

イタリアの外交官として活躍され、現在京都産業大学教授のロマノ・ヴルピッタ氏の提言文がある。

氏は三十年前、初めて留学生として来日された時、是非行きたい所に「靖国神社」があったそうである。日本の文化、美しい心、歴史の偉大さを知り理解する為に、この「神社」参拝の憧れがあった。またもうひとつの理由は「父親もこの前の大戦争で戦死したことです。」と云われる。

この参拝時、知り合いのイタリア人に出会った。そして「あなたはここに、よくおいでになるのですか」と尋ねられた。知人は「父も戦死しました。この神社は私の神社でもある。英霊が祀られているところは国と関係なく、宗教と関係なく、お参りするのが神ながらの、ごく自然の気持であると信じています。」と答えられた。

氏は「世界の諸国の中で日本くらい英霊に対し、彼らの行為を国民の誇りとし、彼らの犠牲を後世の模範とする心を忘れ、ただ犠牲を悲しむばかりの国民を知りません。」「これは英霊の犠牲を裏切ることです。国民に犠牲を要求した日本国は、国民を裏切ったことになってしまいます。このことは、国家の道徳的基盤が無くなったということです。そして道徳的基盤を無くした国は、今、国民に訴える資格を失ったということです。」と論じられ、「勝利者の理論に従い、敗者を勝利者の観点から裁くという理屈っぽい態度をとった悲しい現象が今の日本破綻の始まりです。」と記されている。

第四四八回 宗像大社歌会詠草

大野展男 選
毎月末日〆切

田久 井上 光
痛み止め飲まず眠りし老い妻の寝息やすけし耳澄まし聞く

福間 池浦千鶴子
巣立せる鳥さながらにたちゆきて転勤族と子はなりにけり

（評）一首目は、常用していた鎮痛剤を今宵は飲むこともなく眠入った妻の静かな寝息をそばで聞いている夫の大きく深い愛情が、二首目は、企業立国の狭間にあってよろこびの中にもちょっぴりとある不満を、ややぎこちない表現ながら母親らしい愛情が、表現されていて同感を呼ぶ。

曲 天野 玲子
おいらん草はらりと紅のかんざしを落して今年の夏が過ぎゆく

朝野 藤井 浩子
吹く風の少し秋めく朝なり野ぼたんの花ひらひらと散る

（評）日本の季節の微妙な移り変りを。一首目は、おいらん草の、二首目は、野ぼたんの花の散りぎわを逃さずとらえて詠い共に物しづかである。そこがいい。

名古屋 小田 喜一
若き娘の流行と言へど眼のやりば戸惑うばかり下着ルックは

名古屋 小田 留子
敬老を軽老となすごとき世に末を案ずは吾のひがみか

福間 中村 勇
農園の小屋に休めば蚊の一つ汗に汚れしわれにまつわる

原町 八波 五月
夫の病名肺癌とカルテに書きて有り痛みは共にと夜も日も祈りき

池田 小田 いせ
みたま今帰り来にしと盆の宵灯す炎の揺らぐをよろこぶ

城南ヶ丘 久本 成子
明けきらぬこの静けさにひっそりと月下美人の花終りたり

光岡 森田富佐子
勝つことを目指して戦う高校生負けしは涙し砂持ち帰る

徳重 石松ヤス子
名古屋より甥の送りし小包に我が好みの八ッ橋ありき

光岡 古森テル子
夏空に積乱雲のわき昇り樹木の裾に光り射しくる

吉留 高山 信子
日に光る木々の緑を透し見る格子戸の家日本の家

光岡 四之宮多惠子
夕闇が訪れんとす今宵また夜のとばりに小さき秋かな

福間 井上かつみ
朝露にしめれる雑草をゆらしつつ機械に刈るに蛾の飛び立ちぬ

武丸 中村さつき
四人の子育てし頃を懐かしみストレッチする朝なる夕なに

在自 佐々木和彦
山陰を通る電車の車内には秋の蛍光灯のあかるし

町上津役西 有吉 陽子
町並の古き銭湯消えゆきし空地にビルのまたひとつ建つ

有安 原田 衛
敬老の日に孫達に贈られし花も人形もただに嬉しも

田野 森 甲子
連作の苺畑を消毒し施肥し深く土を耕す

土穴 瀧口 敦子
博多湾靄に包まれ時折に鳴らすは霧笛か汽船出でゆく

光岡 河村 久光
ソファーに坐りクーラーの風うける観葉植物数あるロビーに

日の里 大和美由紀
定年の夫が育てし水蓮の一輪咲きぬ白すが清し

大島 越智 治子
家めぐりひるがへりゐしつばくろの南に去りて吾亦紅咲く

自由ヶ丘 細川 絹子
昨年の落種子なりや鶏頭の大小さまざま庭に花咲く

田野 森 つるの
メモを見て作りし茄子のからし漬ぴりっと辛し食欲の増す

鐘崎 安永 久子
賑やかにありし夕餉も孫等去り腑抜けのごとくテレビに過ごす

城南ヶ丘 中間日出子
孫の去りいじられてゐしカブト虫夏の終りを静かにエサ食む

国防意識涵養のために

八月三十一日の午後早い時刻、在日米軍司令部から防衛庁に伝へられた早期警戒情報によれば午後零時七分に、北朝鮮北部の日本海岸に面して集中的に存在するミサイル基地から、一発の弾道ミサイルが日本列島の方向に向けて発射された。ミサイルは二段式で、一段目は数分後に日本海の中、能登半島と発射地点の中間より少し北朝鮮寄りに落下し、弾頭部分が本州の東北地方上空を横断して、太平洋上、三沢市の北東約五百八十キロの地点に着弾したらしい。今から五年前の平成五年五月に同じく北朝鮮の弾道ミサイルが日本海に着弾した事実はまだ記憶に新しいが、それから五年を経過して、彼国の弾道ミサイル技術は遂に日本列島を飛び越すまでに進歩したわけである。

衝撃を受けた我が政府の、これは近来珍しいほどの強硬な抗議と制裁措置実施の声明に遭って、北朝鮮も多少はたぢろいだのか、九月四日になって、あれは人工衛星の打ち上げだったのだと、弁解とも受け取れる発表に及んだ。それならば今回の挙に日本脅迫の意図は無かったのだ、との弁明が成立つと読んだのであろう。

○

爾来二週間経つが、謎はまだ解明されてゐない。さすがに友好国のロシアは、それが確かに人工衛星であり、予定の軌道に乗って運行し始めたとの証言を公表したが、アメリカの衛星観測システムはそれを確認してゐないといふ。衛星なのか、攻撃兵器だったのか、日本人自身の技術でそれを確認できないもどかしさはともかくとして、仮令衛星だったとしても、その技術は直ちに軍事用に転換乃至応用可能なものとして警戒を緩めないことが当然自明の要請だろう。

もしそれが正真の弾道ミサイルであったとするならば、今回の発射の目的は何だったのか。単なる到達能力についての実験なのか、それとも目標を三陸沖に定めての実射であって、その意味は日本への無言の脅迫なのか、米朝ミサイル協議を目中に置いての力の示威なのか。

あれは人工衛星だったとの言ひつくろひがあった以上、少くとも直接の脅迫といふわけではなかったが、我々がこの事件を我が国の安全保障に対する重大な脅威と受けとめるべきであることは是亦当然の理である。さういふわけで九月十日の夕、自由党西村眞悟代議士の呼びかけで催された「北朝鮮の暴挙に抗議し、我が国の安全保障体制確立を求める緊急国民集会」で九段会館に参集した超党派の国会議員諸氏の交々の発言にはなかなか熱が籠ってゐた。徒らに敵愾心を煽るやうな言辞は少く、問題は専ら我が国民の国防意識の在り方に存する、との指摘が多かったのは評価に値することだった。

○

その国防意識といふことについて、この機会に一言注釈を插ませて戴くのであるが、その要諦は理念的な次元で言へば、「自分の国は自分の知恵と力を以て守る」といふ覚悟に尽きるのであり、且つそれを平生から普通教育の段階で国民の心の裡に養成しておくことが肝腎である。防衛のことは一部の専門家に任せておくといった態度では、一朝有事の際に国を挙げての効果的対応といった姿勢は決して取れないものである。

具体的な例を挙げてこれを言へば、早期警戒体制の整備の一環として偵察衛星の開発を、といふ声が逸早く、しかも思ひがけなくも野党の一部から挙った。しかしわづかこの一言に対しても、早速に「軍事目的専用ではない多目的衛星として構想せよ」との声が出て、国民的合意の形成が如何に難しいかを感じさせる。第一、衛星による北朝鮮ミサイル基地の監視体制が何年か先に実現したところで、それはどこまでも偵察であり、実際にミサイルが飛来するやうな事態が生じた場合、それに対する迎撃・防禦の手段がないことは現在と全く変らない。専守防衛といふ原則を従来の如き姑息な解釈で運用しようとする限り、第一撃で戦勢を決定してしまひかねない二十一世紀の核戦争では無防備と同じことである。

そこでやはり米国との緊密な同盟関係を維持して、米軍の抑止力に頼るといふ才覚が是亦必然の知恵として要請されるのだが、すると今度は、集団的自衛権の行使は憲法違反であるとの歴代内閣の珍解釈が障害になる。当方からは米軍の危機救援にかけつけることはできませんと予め宣言してゐる同盟国の軍事に、それでも体を張って協力しようといふお人好しの軍隊が存在するはずはない。「天は自ら助くる者を助く」といふ、この平俗な格言の心さへ理解できない国に救助者が現れる道理はないのである。

○

かうしてみると、上記の普通教育段階での国防意識の啓蒙といふ作業の要点はかなり判然としてくる。他でもない、現在の日本国憲法の含んでゐる、米軍の軍事占領の基本方針となってゐた抵抗放棄・屈従と服属の思想の迷蒙をまづ打破することである。現実の憲法改正（むしろ現憲法破棄、自前の憲法の制定）は確かに高度の政治の世界の問題である。しかし、若い世代に向って、憲法のこの部分の思想こそが亡国の誘因なのだ、と説くことは志と見識のある成人の誰にも可能な啓蒙活動である。

（神社新報）

鈴木重胤奉納「中津宮」扁額御修復を終える

この度、幕末に鈴木重胤奇進、右大臣藤原（花山院）家厚筆に成る扁額「中津宮」が御修復を終え、去る五月二十九日中津宮本殿に掲げられた。

この扁額は、今年一月十五日、中津宮神庫で偶然に発見された時には、虫喰い等で傷みがひどく、文字の色は色褪せていた。修復は材質の桐で損傷部分を補強、また変色していた「中津宮」の文字部分の色は紫色と判明。この色は伝承にある「中津宮には八尺瓊紫玉を奉斎」によっても紫色の使用は中津宮の色として一致する。

扁額の寸法は、縦九十一㎝、横三十四㎝。裏面には文久元年六月四日と彫り込まれている。資料によれば重胤の奉納月日は翌年の文久二年八月二十七日中津宮に参拝し、ついで、沖津宮・中津宮に花山院家厚の揮毫にかかる扁額を奉納す、とある。奉納当時の扁額の取り付け場所は、寸法的には本殿ではなく拝殿に掲っていた様に思われる。その後の拝殿改修、また外の扁額に代って蔵入りになったものと思われる。当社の宗像神社史の中には、沖津宮・辺津宮の扁額については写真入りで記載されているが、中津宮の記載はない。このことからも、かなり以前から行方不明となっていたものと思われる。

鈴木重胤は（文化九年・一八一二～文久三年・一八六三）、淡路に生まれ、國典講究に志し、本居宣長・平田篤胤・大國隆正等に就いて学び、弘化元年（一八四四）江戸に出て、著述に励むが文久三年八月十五日刺客により倒れる。

重胤は、敬神尊皇の志深く、特に宗像三女神に対して深い信仰を捧げた人で、契機は天保十四年（一八四三）正月六日、重胤三十三才の時、花山院家厚邸内の宗像神社に参拝して霊感を受け、著述がとみに捗るを覚えるに至ったことにあるという。以後宗像大神に対する崇敬の念は大和の宗像神社、さらには筑前の本社に参拝すること四度に及ぶという。現在その中の三度の紀行が残っている。

第四回目の文久二年（一八六二）、この時、当社三宮に扁額を奉納する。重胤五十一才の時であった。

この宗像参拝の道程は、六月九日江戸発。伊勢・大和を経て七月十一日入洛。十四日京都宗像神社参拝、十七日大阪へ、二十九日淡路につく。八月二日墓参。内海を船で渡り、厳島に詣で、また船に乗り、二十六日宗像本社に詣でて奉幣。二十七日中津宮に奉幣。閏八月三日帰路に就く。京都・大和を経て、伊勢より三河と海道を通って江戸に帰ったとある。

この翌年、重胤は五十二才の生涯をとじる。その間皇國の大道を宣明するに努め、百余部にのぼる著述をなしたが、中でも祝詞講義と日本書紀伝とは、畢生の心血を注いだものである。

「中津宮」扁額は、文久二年の奉納より、一三六年の時が流れた。途中闇の中にあったが、この度修復を終え美しく甦り、久々に日の目を見る。重胤の宗像大神に対する深い信仰のもと苦労して奉納された往時が偲ばれる。

――◇――◇――◇――

鈴木重胤（すずきしげたね）

一八一二～六三年。

幕末期の国学者で、通称は勝左衛門と呼ばれ、号は櫨廼舎、厳櫨本などがある。重胤は諱である。

文化九年淡路国津名郡仁井村の代々庄屋をつとめた家に生まれ、父重威の教えで幼い頃より国学を志し、大阪や神戸で奉公するかたわら学問に励んだ。

天保三年（一八三二）から平田篤胤に書信による教えを受け、また同五年頃大国隆正に入門した。

二十余歳にして自ら開塾し和歌を教えた。しかし篤胤との直接の面会はその死で果たすことができず、その霊前で門人たることを誓ったと伝えられる。

その後は江戸に居を構え、越後や出羽などへ赴きその学説を広めた。

彼はとくに「日本書紀」と祝詞を重んじ、嘉永から安政にかけて執筆した『延喜式祝詞講義』と『日本書紀伝』は代表として世に有名である。

文久三年八月十五日没、享年五十一歳。

著書は他に「中臣寿詞講義」・「古始太元考」などがある。

（神道事典・国学院大学編より）

「鈴木重胤」全集より

一誌一話 (72)

古代の海上航路 (7)

樂 岱子

古代からの公海路海北道の航路標識とされる沖ノ島には、その時期よりもまだまだ古い時代の生活遺物を含んだ台地がある。

島への上陸地「御前」の左側を岩棚に沿って上っていくと、粘板岩を基盤として、砂礫を多く含んでいる粘土質の土壌の台地がある。昔、社務所があった所で「御高」と呼ばれている標高一〇メートルの台地である。

ここからは、土器・石器（石斧・石鏃・石鉛・石錐・石匙・スクレーパー・剥器・敲石・凹石・磨石など）と骨角器らしい物に混って魚骨・獣骨・貝類等も、多量に出土してきている。

沖ノ島は二〇〇万年前に隆起した島であると言われている。

日本列島が火山の噴火活動により、四島を中心として弓状に造成してきた島国であるが、この時期に沖ノ島も同時に創造されている。島を、形成するほとんどの石質は粘板岩と、石英斑岩である。つまり当時は大きな湖であったといわれる日本海に堆積した粘板岩を、石英斑岩が刳り抜いて浮上して出来た岩島であるために、総体的に土が少ない。

同様なことは玄界灘の北西の端対馬にもみることが出来る。

この様にお高（遺跡名―旧社務所前遺跡）では、時代ごとの生活層を十層によって判別することが難しく、またそれぞれの互層は形成できず不鮮明であり、ほとんどの土層が、いわゆる攪乱層である。

しかしながら、出土してくる土器により、縄文時代前期から弥生時代の終末期まで、島は当時の社会でも生活に利用されていたことがうかがい知れる。

やはり多くの土器とともに魚骨や海獣の骨また貝類の出土をみることにより、沖ノ島近郊は当時すでに漁場であったことはうかがい知れる。

中には工具として使用されたと思われる鹿の骨なども出土してきた。

対馬暖流とリマン寒流が交わう沖ノ島近郊は、暖流魚と寒流魚の宝庫であり、福岡県最大の漁場として知られているが、昔の人々も魚を追い、島の周辺までできていたことが推定できる。

縄文時代・弥生時代ともに出土してくる魚骨はサメ類やベラ類がほとんどである。中にはブリ・マダイ・マフグ等もあり、出土数は少ないが、若干の魚類の骨格を採集することができた。

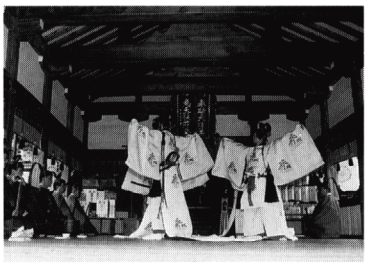
海獣はニッポンアシカがほとんどであった。

貝類は一般的にわかる、サザエ・アワビ・マツバガニ・ムラサキインコ・イボニシ・カモガイやビナとよばれる小形の巻貝類などが多く採集できた。

ただ沖ノ島の生活址と言われている旧社務所前遺跡には短日間でも人々が住んでいた様な住居址や、何か作業を行っていたのではないかと言われる工作場的な遺跡を発見することが出来ない。

やはり短期間の漁期に魚を追い、海草や貝類を採取し、キャンプ的な生活をする狩猟・漁労の場として利用されていたのではないかと思う。

田島放生会
各神賑行事賑わう



風俗舞（ふうぞくまい）

当大社春秋の大祭に奉納される国風舞で正式には「大嘗祭主基地方風俗舞」と呼ぶ。大嘗祭とは歴代天皇が御即位される時、一世一度の最大祭儀である。

この祭儀に際し、新穀を奉献する斎田が、京都を中心に西方の国「主基地方」東方の国「悠紀地方」とに別け指定される。この斎田地方の風俗歌を基に宮内省雅楽部で作曲、作舞され、大嘗祭大饗宴にのみ披露される国風舞で「主基地方」「悠紀地方」風俗舞と称され若者が奉仕する。

この舞は、門外不出を原則として、大嘗祭の了えたる後は一度たりとも奏される事なく、昭和以前の国風舞は全てが消滅している。

昭和三年、昭和天皇陛下御即位の大礼に際し、福岡県が主基地方に選ばれた。この時、京都御所紫宸殿に、宗像大社関係者一同御礼詣を行った。この様な関係から当大社では、昭和四年に主基地方勅定記念会を設立し、特別の思し召しを以って宮内省より「主基地方風俗舞」を御下賜いただいた。この作曲者宮内省楽師、多忠朝氏は、昭和四年四月来県され氏子中より選ばれた青年達に歌舞を指導され、爾来大社では毎年春・秋大祭に神前奉納されている。

流鏑馬（やぶさめ）

秋季大祭二日祭早朝、恒例の流鏑馬神事が宮木貞彦氏他三名により奉納された。

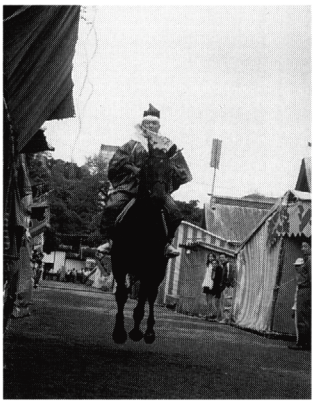
当社の流鏑馬神事の歴史は古く、その年の豊作を祈る占い行事として行われる。小笠原・武田・三浦・等諸流派が鏑矢を用いるのに対し、当社で奉納される流鏑馬は、江戸期以前の姿をのこす武士の姿で行う。

流鏑馬は武士の習練であるため、平常着である水干・直垂の類に、行縢・射籠手・綾藺笠という狩装束とある。

（平凡社大百科辞典）

この姿に近い装束で行う当大社の流鏑馬には遠い昔宗像武士が戦のもと、本年の豊作と、一族の繁栄を祈り神前の馬場道で征矢を射たのであろう。

現在各所で、行われる諸流、流鏑馬がその流派に合わせ装束も異なり、鏑矢を持いるに対し、当社の流鏑馬では昔来より征矢を用いる。的の置き場も古来の姿をのこしていると云えよう。



翁舞（おきなまい）

秋季大祭に翁舞が喜多流梅津忠弘氏門下社中により奉納された。

当大社の翁舞も古い歴史がある。今から約五百年前（明応八年）、時の大宮司宗像氏国は、沈鐘伝説で有名な神郡鐘の崎の沈鐘を引揚げんと、船網をかけた、この時の時天俄かに掻き曇り狂瀾怒濤を呼び大鐘引揚げを断念した。すると海上忽ちに鏡の如く穏やかになり、その海面に翁面が浮かび上がった。この面を龍神の授け給うところと感激し、神前に奉り神宝とした。

ある年、国中に悪疫が大流行した際、この面を以て舞を奉納し、悪疫退散、災難魔除、延命長寿を祈ったところ、たちどころに悪疫が静まったと伝えられる。

その後秋季大祭中に年一回神前に翁舞が奉納される様になった。またこの舞を奉仕する喜多流は黒田家の能師が同流であった事から現在でも、喜多流社中が奉仕されている。

浦安舞（うらやすまい）

昭和天皇御製の和歌を皇紀二千六百年（昭和十六年）奉祝の際、祭祀舞と制定され、広く全国の神社に奉納されている舞である。

この舞は、当時の宮内省楽師、多忠朝氏が作舞された。

"天地の神にぞ祈る
朝なぎの海のことごとく
波たたぬ世を"

この御製は昭和八年の歌会始めにうまれた和歌である。

上海事変・五二五事件等のおこった昭和七年をふり返り、不穏な世相に対し、陛下が御憂慮を安かれと祈られたお歌と拝される。（昭和天皇の御製より）。

南坊流献茶（なんぼうりゅうけんちゃ）

当大社では、春・秋大祭に氏子中（田島校区）の少女達（中二年生）が従来より奉仕している。

十二単に正装し手に檜扇と鈴を持ち、単と紅衣・張袴のさばき美しく舞う姿は、参拝者のカメラフラッシュに照り輝いていた。

当社秋季大祭三日午後二時拝殿に於いて南坊流瀧口宗芳社中による献茶祭が奉仕された。

南坊流とは南坊宗啓（そうけい）（千利休高弟）により開流されたと云う。天正9年（一五八一）利休から「台子の法」をはじめ種々の秘事を伝授され、天正十三年（一五八四）に「露地茶清規七ヵ条」を利休と共に定めたとある。（世界大百科事典）。

その後南坊流は江戸南坊（京都）と筑前南坊とに別れたと云う。黒田家が筑前を領した頃から福岡中に広がり、現在に至っている。この南坊流と当大社の関係もその頃より始まったと思われるが、一時期途絶えたが、昭和中期頃復興したと聞く。（当社茶道小方教師談）。現在、当社巫女が習得しているのはこの「南坊流茶道」である。

宗啓著の「南坊録」九巻は、利休の説く茶道を宗啓が筆録し編纂したものと伝えられ茶道の「奥書」と云われている。

日誌抄

九月一日(火)　月次祭斎行・風鎮祭・松尾神社神殿祭斎行
三日(木)　参拝・宗像郡遺族連合会中村会長以下十八名
四日(金)　松尾神社遷座祭
七日(月)　参拝・白祥運送㈱宮地嶽神社実窃犯人名㈱梅谷仏具梅谷社長以下三名
八日(火)　来社・㈱めん食神崎社長他三名
九日(水)　参拝・鹿島市神社連合氏子婦人会西川会長以下四十七名
十日(木)　会議・秋季大祭準備打合せ会
十一日(金)　会議・主基地方風俗舞保存会役員会
十二日(土)　沖津宮御神鑾迎神事・大島福吉丸（御座船）にて宮司以下神職四名出向奉仕
十四日(月)　参拝・神郡宗像近の為繰り上げ斎行
十五日(火)　月次祭斎行
講演・奥宮種男氏講演会、午後五時十五分より清明殿にて開催
十七日(木)　会議・宗像大社氏子総代会
二十日(日)　平成十年度玄海町戦没者慰霊祭、宗像護国神社にて斎行
清掃奉仕・田島校区老人会約百名
二十一日(月)　来社・大韓民国福岡領事館総領事徐賢燮氏他七名
二十二日(火)　参拝・九州旅客鉄道㈱寺田区長以下九名安全祈願
二十三日(水)　皇霊殿遥拝式
宗像祖霊社秋季大祭
二十四日(木)　沖ノ島取材、西日本テレビ有隅氏以下七名渡島
二十八日(月)　参拝・熊本県神社庁竹内支部長他七十四名
二十九日(火)　参拝・出光興産㈱窪田顧問他十一名
三十日(水)　入御祭（台風接近）
薪能採火式十時半斎行、藤田実行委員長以下十二名参列

〔ご案内〕
十一月の各神賑行事

第二十八回
西日本菊花大会

西日本地区は元より全国的に注目を集めている菊の祭典西日本菊花大会は、本年も宗像大社特設会場に於て開催される。

本大会は、菊作り九州一を決定する大会として、福岡県を始め、大分、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、山口県各地から、代表的菊花製作者が丹精込めて作成した菊花約三〇〇〇鉢が、一堂に会し技を競う。秋晴れの神苑に大輪、懸崖、盆栽、総合花壇など見事な菊花が咲き競います。

期　日　十月三十日～十一月二十三日迄
会　場　境内全域（展示ハウス百畳棟）
表彰式　十一月十六日

——◇——◇——

第十一回
宗像大社刀剣展

菊と刀といえば、古来より日本の象徴であったように、日本人の心をひきつける魅力があります。

本年も神社刀を中心に、崇敬者の方々の御協力のもと、鎌倉時代から現代までの刀剣類を展示します。

期　日　十一月一日～十一月二十三日迄
会　場　宗像大社神宝館一階
拝観料　三百円

——◇——◇——

第二十四回
奉納吟剣詩舞大会

錦秋の菊花薫る境内に、我が国の伝統と「大和精神」を伝える吟道に永年精神されている、熊本市に本部を置く清香吟社（会長益中鵬山）社中の会員約百名が、神前に詩吟、剣舞を奉納。清明殿に於て、日頃練磨した自慢の喉で詩吟剣舞大会が行われます。

期　日　十一月三日
午前九時三十分より
会　場　宗像大社清明殿

——◇——◇——

第二十七回
献詠短歌大会

福岡県内を中心に、各地の短歌愛好者から、たくさんの詠草が寄せられ、著名な斯界指導者の先生方を選者としてお招きし、講評・指導を受けると共に、参加者相互による批評、感想を発表するユニークな大会として好評を得ています。

期　日　十一月八日
午前十時より
会　場　宗像大社清明殿

——◇——◇——

第十八回
少林寺拳法奉納演武会

この演武会は、宗像地区の少年拳士・大学生・一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期　日　十一月八日
午後一時より
会　場　本殿横境内（雨天の場合中止）

——◇——◇——

第二十五回
宗像大社本因坊戦

宗像地区囲碁募実力ナンバーワンを決める大会で、宗像郡市内より囲碁愛好家約百名の有段者が出場、四段以上の実力者による本因坊戦と、一般参加選手による有段者の部が行われ、盤上での熱戦が繰り広げられます。

期　日　十一月二十三日
受付時間　午前九時三十分から五十分迄
会　場　宗像大社清明殿

秋の交通安全県民運動
交通安全キャンペーン

今年も秋晴の下、秋の「交通安全週間」に合せ、宗像市と福間町境の白水峠県道で"秋の交通安全県民運動"安全キャンペーンを宗像警察署と交通安全協会・宗像大社と合同で九月二十四日実施した。

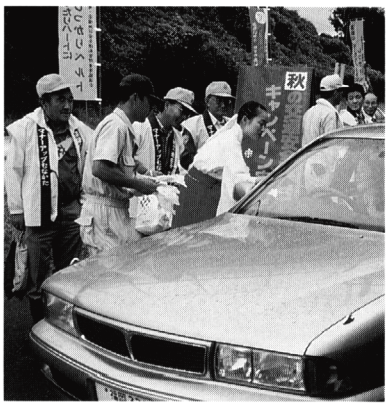
当社より神職一名、巫女三名が出向し、宗像署員・交通安全協会役員と一緒に街頭運動を行った。

宗像署では、毎年春秋の交通安全旬区に"交通事故撲滅"を願って、交通安全協会を始め各行政、関係諸団体と協力して、交通安全キャンペーンを実施している。この春秋キャンペーンに当社も毎回協力しているのである。

当日は午後三時より約一時間に亘り、県道66線（旧国道3号線）を通過する車に、啓蒙用チラシや飲料水、又当社の「交通安全お守」をドライバーに手渡し「交通安全をお願いします」「シートベルトの着用を忘れずに」と一人一人に声をかけた。又今年の安全キャンペーンでは、特に"お年寄"の運転・歩行等に注意を呼びかけた。

この県道66線は、旧国道3号線であった関係から宗像市郡の中心県道である為交通車量も多く、交通事故も多い「交通取締重点路線」の一つになっている。

"おもいやり・ゆずりあいで安全運転を心がけましょう"



宗像大社歌会
俳句作品集（四二五）

福　間　森　清
朝冷えやつばくろの影一つなし

自由ケ丘　細川　絹子
風にゆれ夕ぐれをとぶ秋の蝶

小　笹　山下しづえ
九十翁入れ歯そろいて秋日和

藤　沢　井上　玄洋
朝顔の棚を彩る終の花

日の里　花田いつ枝
秋祭吉のみ籤は疑はず

東　郷　吉武　湧泉
痛恨の怒りは果てぬ原爆忌

東　郷　中野　きみ
近づけば憤怒ますます原爆忌

東　郷　吉田　衿子
天の川子に托す夢果てもなし

東　郷　吉田　杏子
黄鶺はわが友にして峡の畑

東　郷　三浦美千代
茶の香りふくよかにして今朝の秋

東　郷　有吉亜紀子
五月風夫の遺品のアロハシャツ

東　郷　田中　雨葉
白木槿咲く単線の分岐点

東　郷　木原　房子
七彩に朝光はじく草の露

（続）浜の寄物 131

いしいただし

今年の気象は異常だった。東北ではとうとう梅雨明け宣言はなかった。各地で旱ばつ、大水害、酷暑。台風銀座といわれた鹿児島・宮崎には上陸がなかった。

勝浦浜の中国製品漂着

「地球がどうかなりよっちゃなかですか」という会話があちこちで交わされた。

隣の中国では44年ぶりという長江（揚子江）の大洪水に見舞われた。洪水は今世紀になって31年、49年、54年とあり、そのうちで最大の洪水で、長江中流の武漢と、もう一つ東北区松花江（アムール川支流）がひどく、死者行方不明者五千人、被災者は約二億四千万人にのぼり、全壊した家屋五百万戸にのぼるという。中国人の五分の一が何等かの大洪水の影響を受けたといわれる。

テレビでは天安門事件以後人気のない人民解放軍が水害地に動員され、その活躍ぶりが写し出されていたし、点数をあげたという。九月に予定されていた江沢民国家主席の日本訪問も延期されたほどである。

その長江の大洪水は日本列島に押寄せていた。

八月十一日だった。山口県・豊浦郡豊浦町へ行ったが、帰りがけに下関市・横野海岸を見たら、漂着物が多く目につく。それも夏には珍しく大量である。浜を歩くと、流木・竹・建築材片等で、竹には根がついているものが多い。建築材片は、ペンキが塗られているものが目についた。どれも漂着物には、石灰質のものが覆い、エボシガイ、フジツボが付着している。建築材片の中にはフナクイムシが巣食っている。プラスチック容器、ガラスビン類のどれもが中国製品である。これらの漂着物を見ながら、長江大洪水が一瞬過った。

福間・古賀の海岸は夏でも毎日歩いているが、ほとんど漂着物は見あたらない。ただ少ない漂着物の中に、今迄韓国製が見られたが、中国製のプラスチックライターや漁業用浮子が目についた。

二十日に孫をつれて津屋崎へ行ったついでに、浜を歩いたところ、海岸道路側に大量のゴミがあり、南側の民宿や海水浴場にもゴミが寄っており、ゴミが集められ積まれていた。先述したように漂着物にはエボシガイ、フジツボが付着し、それが腐れて周囲に悪臭を漂わせていた。どれもが中国製品であった。ここで龍が玉を持っている極彩色に塗られた彫刻を拾った。「長江大洪水」のものであることを確信した。

家に帰ると、地元の新聞社や南日本新聞社から電話がかかっていた。「鹿児島県・吹上浜に大量の中国製品のゴミが漂着しているが長江大洪水のものの可能性がある」そのコメントを求められた。

食事をすますと、津屋崎町・恋の浦へ行った。ここも北側、浜の入口付近にゴミが大量漂着、津屋崎浜と同じ状況である。白石浜の方はどうであろうかと、行ってみると、ここは不思議にも漂着物がない。人影もなくただ波の音だけで静かだった。先の勝浦浜側を双眼鏡でのぞいて見たら、漂着があがっている。しかしそこまで歩く馬力がもうない。翌日歩くことにした。

翌早朝、勝浦浜へ、奴山川農業取水口から勝浦港まで大量漂着している。根のついたヤシ科の樹木から、竹、大木まで、建築材片、窓枠、漁業用の竹製浮子、舟の櫂など、他にプラスチック容器やガラスビン、ライターも大量である。どれも長期間の漂流で付着物もつき、油で汚れている。

中国製ライターは三百個ほど拾った。祝君健康、祝君好運、一帆風順、万事如意、鵬程萬里、龍馬精神、まだまだたくさんある。「中国語成語辞典」でその意味を調べてみると結構楽しい。

ただこのライター、中に液体が残っている。てっきり漂流中に海水が入ったと思っていたが、干していると大きな音をたてて破裂する。保存する時にはガスを抜いた方がよい。

それから福岡市・海の中道、古賀浜、新宮浜を歩いたが、ここでは大量漂着は見られなかった。八月末には鹿児島県・吹上浜、高知県・下方浜を歩いてみた。

青柳種信著　平野国臣写
瀛津島防人日記（下巻ノ三）

〝ありそみに
たてる山松なれをかも
憐とぞおもふ
独しあれば〟

同（七月）四日。壱岐のかたの海に、白浪の山のごとく高く見ゆる。怪しみ見るほどに、くろく大なる魚の、浪をかづきて浮沈つ、行也。かの物しれる海人、せみ（背美）といふ鯨也といふ。から（漢詩）哥に、鯨魚跋浪滄溟開、といへりしを思ひ出られた。此海人は肥前国松浦郡の湊浦（みなうら）といふ所の者にて、鯨を取時に、海底を潜（くぐ）り、鯨に縄を着ることを業とする、はざしちふ者なり。

こたび大島の海士にやとはれて、六月の中比より来て、かのあたりの事など物語るに、すこしは旅の思ひをはるけぬ。

同（七月）十一（五）日。西の方より大なる竹、浪のまにまにながれ来る。船漕出て取あげみれば、銭（輕）竹なり。長さ六尋ばかりなり。網の泛子（うけ）やうのもの也しとみえて、根かたに穴を彫たり。

ところどころ石花（せ）・蛎（かき）などつきてをかしき物也しかば、人々花瓶などに切て翫ぶ。

〝から国を
佗てし爰により泛子（うけ）の
網手やひとり
うきねすらしも〟

同（七月）六日。海人のかづ（潜）きを見て、

〝かづき得て
われに得しめよ大海の
水底てらしし（沈）づく
しら玉〟

爰（かく）の鰒はとる人稀なる故に、世にこえて大なれば、玉もありぬべしとて、磯に出で、日々に海人の取得たる鰒のうちを探る。白く光なきは孰も多く取得たり。

けふなも、青く光あり、其大さ大豆（まめ）ほどなるを得たり。人々うらやみて、ね（妬）たきこと共をいふ。

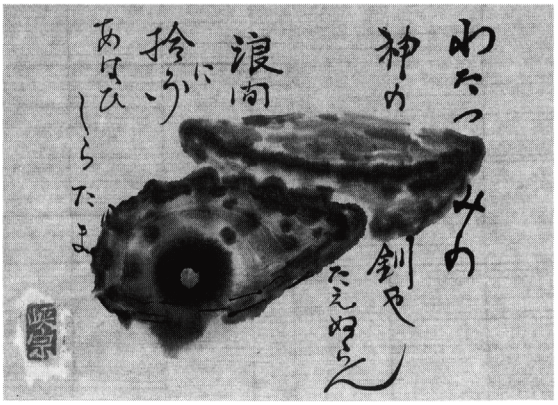
〝わたつみの
神の釧（くしろ）やたえぬらん
浪間に拾ふ
あはひ（み）しらたま〟

同（七月）七日。きそ（昨）の夜なかより海あれて、磯に沖つ藻の多く寄た見て、

〝あやなくも
来よる玉藻のうつくしみ
なれにたぐへむ
妹もあらなくに〟

とやいはまし。

白玉得たり〟



故郷の神々（42）

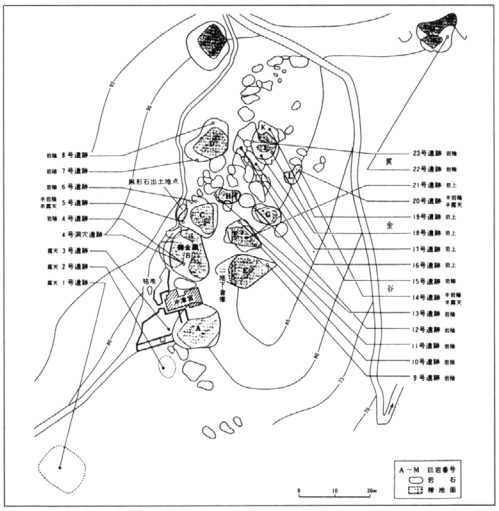
〈神祭りの場と祭りの変遷〉

昔、社務所があった所の「お高」から木の鳥居を抜け、原始林の樹木が覆い被さる様な急勾配の参道を登って行くと、一号遺跡の一歩手前の所で狭い平担地に着く。ここには古い手水鉢があり、ここにも小形の木の鳥居が建てられている。

鳥居を前にして此から右に曲がって行くと、崖際を見ながら通る古い参道がある。今はもう藪状になっているために、あまり道の見分けはつかめなくなってきているが、この参道から左手に一号祭場を見ながらぐるっと廻って行くと、右手にはまだ未調査の二号遺跡がある。

この参道は何時頃まで使われていたかは不明であるが、ここからは古代祭祀の巨大な岩が群れをなし、目前に迫ってくるような形で姿を現す。まるで祭場の岩々を見上げる様である。

一号遺跡と二号遺跡の間を抜けて、沖ノ島古代祭場へと入っていく訳である。



この場にある両方の祭場が、沖ノ島古代祭祀の終末期にあたっている。

一号祭場には平担ではあるが、広い大きな岩が、土に埋もれた様な形をし、そこをやはり祭場の中心としている。祭場は広さ直径で約十mもある。島では一番広い円形の祭場である。この祭場は調査が途中でもあり、今も祭祀奉献品が山積された様な状態を呈している。

二号遺跡は未調査の祭場である。一号遺跡と同様に祭祀形態は露天祭祀に属している。採集した奉献土器をみると終末期に属するが、一号ほど広くはなく、時期的にも一号程永くはない短い期間の祭場であった。

一号祭祀は一祭祀一祭場と言われる原始神道期の祭祀形態も変わってきている。ここに奉献されている、奈良三彩小壺や土器の遍年形態からみると、八世紀代から十世紀代へかけての約二〇〇年間、この祭場で祭りが行われていたようである。

この頃になると内陸ではすでに、自然を対象としてきた神籬・磐境の祭祀から社殿祭祀へと移行していっている。しかし沖ノ島祭祀では、従来の岩を依代として行っている原始神道祭祀がそのままの姿で存続している。一号祭場と二号祭場を門の様にして巨岩がおりなす祭場へと入ると、丘陵部を奥に行くに従い、また高くなるに従い祭りの時代が古くなる。

古い祭祀は平担部が盛り上がりをみせる丘陵上の巨岩を中心とした祭場である。丘陵の高所がやはり古く、時代が新しくなるに従い祭場も周りを囲むように放射状にわかれている。

この様な状況で島の南岸の右側にあたる黄金谷の方に下向していくと、祭祀の時期も新しくなってきている。